

超越者なき自己超越
——ニーチェにおける超越と倫理

竹内綱史（龍谷大学）

「神は死んだ」ということを衝撃的な出来事として記した際、ニーチェの念頭にあったのは、単に神が信ずるに値しなくなったということではなく、あらゆる価値的なものの客観的実在性が疑わしくなったという事態であった。つまり、神を殺した近代科学の世界観は、価値一般の反実在論化をも帰結せざるを得ないということである。それに対するネガティブなリアクションが「ニヒリズム」と呼ばれる。価値一般の反実在論化は、この世の生を全体として生きるに値しないものへとしてしまうのではないか。

だが、「神の死」にショックを受けるのは神を信じたい人だけであるのと同様に、価値一般の反実在論化に絶望するのは、価値的なものの客観的実在を信じたい人だけである。ニーチェの関心は、価値に関するそのような客観主義を乗り越えることへと集中している。とりわけ、この世の生全体が生きるに値するものであるためには、何か超越的なものによって価値が与えられなければならないという発想を、乗り越えようとする。しかしそのような発想は、ニーチェの見るところ、非常に強固なものである。「ニヒリズムの「なんのために？」という問いは、これまでの習慣からきている。その習慣のおかげで、目標は外から立てられ、与えられ、要求されるものだと思われているのだ——つまり何らかの超人間的な権威によって。そのような権威を信じるのを忘れてしまっただけから、昔からの習慣によって、無条件的に語ることができ目標や課題を命令することのできる別の権威を、ひとは探しているのである」（1887年秋遺稿9[43]）。

そのような権威抜きでこの世の生を肯定すること。それがニーチェ哲学の最大の課題であった。その中心発想は、ひとことで言うなら、「超越者なき自己超越」というものである。本提題では、この「超越者なき自己超越」という発想がどのようなものであるかを論じたうえで、その意義を考えてみたい。

伝統的な超越経験とは、何らかの超越者に接することで、自己が変容する（自己超越する）というものであった。そこで大事だったのはもちろん超越者の存在であり、超越的に実在する何か指し示すことに応じて自己を変容させ、よりよき生へと至ることが目ざされた。しかしニーチェはその関係を逆転させ、大切なのは自己の変容であり、言わば超越者はそのための道具でしかないと思なす（そうするとそれはもはや超越的な存在ではなくなる）。こうした発想はニーチェ哲学のいたるところに現れる。真理探究において大事なものは真理ではなく探究そのものであり、良心において大事なものは神や理性の声を聴くことではなく絶えざる自己審問そのものであり、芸術において大事なものは美の表現ではなく表現そのもの、さらには自分自身の人生を芸術作品とすることである。要するに、絶えざる自己変容にこそ幸福の実質があるとニーチェは考えているように思われる。

だがそのような「強者」の倫理は明らかに危険なものではないように見える。絶えざる自己変容などできない者はどうすべきなのか、自己変容に客観的な基準がないなら何でもありなのではないか。けれども、ニーチェにおいて「強者」は単に利己的な存在ではなく、新たな共同性の礎になる存在であると考えられている。「強者」は生き方のモデルを提示する存在なのであり、そのようなモデルの提示は、かつてソクラテスやイエスがしたことでもあるのだ。こうした観点から、本提題では最後に、ニーチェの「強者」の倫理を再検討することにしたい。